

発言：満州事変が伝える教訓＝井上卓弥・公益財団法人安達峰一郎記念財団理事  
毎日新聞朝刊解説面（2021/11/11）掲載

1931（昭和6）年9月の満州事変勃発から90年の歳月が流れた。事変に始まり、日中戦争から対米開戦に向かう30年代以降を現代の感覚で振り返ると、複雑な国際情勢の影響を受けたとはいえ、戦後の国際主義からかけ離れた選択が繰り返されている。

満州国の建国を経て国際連盟脱退に至る経過に関わった軍部、政界関係者はよく知られている。一方、第一次世界大戦の戦勝で連盟常任理事国という先例のない地位を得た日本が、事変まで一貫して秩序回復と安定化に努めた経緯はかき消されてしまった。

極東情勢の緊迫に翻弄（ほんろう）されながら、連盟の主要メンバーとして国際協調外交の命脈を維持しようと腐心した外交官たちの努力も顧みられていない。中でも、連盟規約に基づいてオランダ・ハーグに開設された常設国際司法裁判所（PCIJ）で31年1月、アジア人初の所長に就任したばかりだった安達峰一郎は、名前を忘れるわけにはいかない一人である。

列強と対等に渡り合うために国際法を究め、連盟総会や理事会の日本代表として多くの業績を上げた安達は「常任理事国入りは天佑（てんゆう）」と訴え続けた。幸運を祖国への信用と支持の獲得につなげるしたたかな現実主義であろう。

大戦の再発防止を願う国際社会が、武力によらない紛争解決の任務を委ねた連盟理事会や軍縮会議の場で、安達はその能力を遺憾なく発揮した。欧州新興諸国の少数民族問題で公正な裁定を下し、敗戦国ドイツの巨額賠償軽減策を巡る英仏対立を解消させて頓挫の危機から救ってもある。

安達への信頼は国際紛争の法律問題を裁くPCIJの判事改選（30年9月）で最高票をもたらした。第一次大戦中、ドイツ占領下のベルギー公使として赴任し、欧州の惨状を直視した安達は真摯（しんし）に不戦の意義を捉え、戦争が割に合わない時代の到来を予感していたのではなかろうか。

満州事変は安達を深い苦悩の淵に追いやった。連盟と祖国のはざままで病に伏した安達は34年末、オランダで客死する。同国は外国人には極めてまれな国葬の礼をもって貢献に報いた。

65年の生涯を通じ、日記や回顧録を書く余裕もない激務に殉じた安達は、直筆のほか、

達意のフランス語で口述筆記させた書簡を多数残し、安達の郷里、山形県山辺町の有志や国際法研究者が解析を進めてきた。連盟脱退後も PCIJ などの関連機関や会議への参加を継続するよう促す書面もある。この助言がなかったら日本の国際的孤立は脱退直後から一気に深刻化したかもしれない。

多くの書簡を持ち帰った妻かねが設立した記念財団は昨年、創立 60 周年を迎え、コロナ禍で 1 年遅れながら 22 日、東京で記念の集いが開かれる。財団は 68 年から国際法研究の優れた業績に安達峰一郎記念賞を贈っており、席上、安藤貴世・日本大教授が表彰される。

日本が性急な大陸進出を企てた時代、国際協調の灯をともし続けた安達は、昭和史を学び直す現代人にとって、重い蹉跌（さてつ）の持つ意味を曇りなく映し出す鏡のような存在ではないだろうか。

#### ■人物略歴

井上卓弥（いのうえ・たくや）氏

元毎日新聞ローマ特派員。著書に「満洲難民 北朝鮮・三八度線に阻まれた命」。